≪研究ノート≫

都市における友人と余暇生活

久　川　太　郎

I　都市と青年

現代社会では人間性が失われがちで，自己疎外感が生じやすい。これが都市生活者にノイローゼをはじめとする不適応症状を増加させている。このため，あらためて余暇生活が再検討されている。すなわち余暇本来の目的は，人間らしさをとり戻しさらには心身のバランスを保ち，より健康な状態に保つことであり，その具体的手段がレクリエーションであると考えられている。さらに労働環境条件の世界的な改善，余暇活動に対する価値の再認識，耐久消費財の普及による女性の家事労働からの解放によって全家族的な余暇時間の増加が生じ，戦争等の突発的な事故さえなければ，もうすぐ大衆余暇時代が到来すると考えられている。しかし急激な社会変動，産業文明の進展は，価値感の変動を生じ，その余暇活動に対する社会または個人の準備を完了させるひまを与えない。とくに余暇のすごし方については，都市生活者では，マスコミやレジャー業者によってつくられたブームに甘んじている傾向が強い。この傾向は青年期にまで見られる。スピード，ギャンブル，セックス，非行，アルコール，麻薬等だけが余暇の欲求を充足させるものではない。むしろこうしたものへの異常なまでの普及こそが余暇時代に適応できなかった人間のノイローゼ現象とみるべきであろう。これから東京のような大都市の青少年の生活態度，生き方を理解するためには，都市問題として考えねばならない。すなわち大都市はいつの時代でも青年にとって魅力的な場所でもある。大都市の環境は，物理的な面でも，社会的文化的環境の面でも青年の成長にとって多くのプラスの機会に恵まれている場でもあるがその半面，青年を挫折させるマイナスの機会をも含む場でもある。東京都が昭和43年7月に実施した「都市生活に関する世論調査」では，生活環境に対する都市の評価を安全性，保健性，利便性，快適性の面で5段階評価法を試みている。これによると都民の80—90％もが「よい」もしくは「普通」と高く評価したのは「ゴミ処理」「し尿処理」「水の出」「乗物の便」「小学校の便」「医療機関の便」等々で主として「保健性」と「最低限の利便性」が評価されている。これに対してマイナスの評価が高いものは，「子供の安全58％」「路上駐車による迷惑58％」「遊び場57％」「家屋の密集51％」「交通安全50％」「公園47％」などで主としておとな自身や子供の生存に直接かかりあう安全性の項目である。このように東京の過密は生存の危険を意識するほどに重大なのである。こうした都市の環境で，青少年に何が起こっているのであろうか，この点に関し青少年問題審議会が昭和45年5月に出した「都市化の進展と青少年対策について」という意見具申は次のように指摘している。①「小産業と人口の急速な都市集中に伴って，都市やその周辺地域の自然環境は，次から次へと破壊されまた子どもの遊び場はつぶされ，公害や交通災害が多発している。その結果，都市の青少年は自然の緑から隔てられた生活を余儀なくされ，その健康と安全がおびやかされているのみならず，豊かな情操のかん養がさまたげられている。②都市化の進展は各種の商業娯楽施設の急激な増加をもたらした余暇や所得の増大した青少年がこれらの商業施設に吸収されることが多くなっている。商業娯楽施設の集中する盛り場はもともと都市の匿名性の最も顕著な場所であり，青少年の非行の温床となる危険性を持っているが，最近の盛り場には，深夜喫茶，深夜映画等の青少年の健全な成長を阻害する恐れのあるものがあまりにも数多く見受けられる。」

このような環境の都市化に伴って，もう一面で生活様式の都市化の浸透が同時に進行する。都市化現象は「情報」の拡散によってより強力に行なわれる。さらに情報チャンネルが普及しそれにより居住場所を問わず情報が伝達される。とくに情報生産の中心である都市から送られる都市的色彩の強い情報によって新しい生活様式や生活意識を伝達され，それに呼応して商品が流通する。このように都市への人口集中とならんで生活様式の都市化があらわれるわけである。この生活

様式の都市化はときには生活の近代化，合理化として肯定的に受けとられるが，半面，打算的，功利的，表面的，一面的な人間の接触状況をつくり出していると考えられるわけである。そしてこの生活の都市化現象への変化自体が問題であると同時に，その変化のスピードがあまりに急激なためにそれに適応できなくなって集団ノイローゼ現象をみせている事がより問題となっているわけである。人間は過去数千年間の歴史に実に多くの事を経験してきた。そして人間は他の動物にみられない信じ難いほどの柔軟性と巧みな適応性によって適応してきた。しかし人間はこの間に生物学的に進化し，あるいは遺伝的に開化した新しい種となる時間的余裕はなかった。すなわち生活様式の都市化現象はもっぱら学習と条件反射によって達成されてきた。生物学的には人間は依然として人類の歴史の始めと同じである。

しかしこの都市で青年は生き成長している。青年はこの都市に次の3つの生活の場を持っている。その第1は生活の場としての家庭であり，その第2は学校または職場である。その第3は第1，第2の統制から開放されたいわゆる自由な行動空間である。この第3の生活の場では，さまざまに形成される友人間係やグループの生活を通して社交，遊び，スポーツ，趣味の生活が展開し，あるいは読書，テレビやラジオの視聴，学習，創造的活動なども行なわれる。いわば青少年にとって余暇生活時間のほとんどすべてがこの第3の生活の場で営まれている。またそれは第1，第2の生活の場とは違った意味で青少年の形成にとって重要な意味を持つ生活空間でもある。

この第3の生活の場における青少年の行動とその内容は第1，第2の生活の場における行動が深くかかわっており，とくに第1，第2の生活の場における不適応がこの第3の生活の場に問題を生じていることもよく見受けれら，第3の生活の場が機能的に全く独立しているわけではない。ここで問題になるのは青年の余暇生活の大部分を占める場としての大都市の生活環境である。前に述べた通り大都市社会は他の社会と違って青少年にとって多くの刺激を与え，青少年の種々の潜在的な能力を引き出しあるいは教育活動やスポーツ活動，その他種々の活動をする機会を与え，創造力を高める機会を豊富に提供している場でもあるが，反面，青年に絶望感と厭世感を与える場でもある。このように大都市社会は青年にとってプラスとマイナスの両方の機会を持った構造をしている。

大都市における家庭の親子の世代間の価値や家庭の機能についての意識の相違，学校における過度の進学体制による不適応児の増加，職場におけるノイローゼ等の増加は大都市の生活環境によるものでもある。そして青少年の余暇生活の設定はこうした家庭や学校の生活への適応状況と重要な関連があり，青少年の余暇生活の場としての第3の生活の場を設定することは，東京のような大都市の青少年の成長にとって重要な意味を持っているわけである。すなわち青少年の余暇生活に対して積極的にプラスの機会を提供することに重点をおくことが必要である。このような青少年の第3の生活の場への対応は，青年の非行・犯罪の防止あるいは予防のためのもののみならず青年の生活にとって能動的なものとして考えられねばならないわけである。またこれらのようなプログラムサービス，エリアサービスだけでなく，カウンセリング制度の拡充や青年の組織づくりやリーダーの養成などの施策もぜひ必要なものである。この方向で青年の余暇生活の場として第3の生活の場を設定するには，青年の生活の実態を大都市の環境とのかかわりあいにおいて明らかにさせる事が必要である。すなわち青年の余暇生活についての意識がどんな方向を持っているのか，それが第3の場の生活の場にどう志向され充足されているのか，その過程はどのような人間関係のなかでどのような場で行なわれているのであろうか。そしてそれらの余暇行動が青少年の人格の形成と確立に対してどのようなプラスとマイナスの機能を果しているのだろうか。このような問題に対する基礎的な共通理解を十分に深めておくことが前提として必要になってくる。

このような大都市青年問題の基礎的な理解という目的にとっては，もちろん第1，第2の生活の場を含めた青年の全体の生活構造をとらえ，そのなかに第3の生活の場の占める位置と，その青少年にとっての意味を明らかにしなければならない事は当然であろう。今回は都市の高校生のグループの形成状況とそれに伴う余暇活動について考察するつもりである。

II　青年期の友人関係

大都市における青少年の余暇生活の場は前にも述べたようにプラスとマイナスの両面がある。しかし一般的に言って近年マイナスの条件が多くなっている事が注目される。急激な産業文明の進展に伴う公害の増加，都市化現象に伴う自然環境の悪化，多様化し高度化する余暇欲求に対応する施設の絶対数の不足や規模の問

題，その施設の貧弱さ，商業主義的な余暇産業が提供する画一化され，管理化された消費的，享楽的，扇情的な施設や情報の氾濫など。また激しい進学制度の圧力が青少年の生活態度，行動，意識に多大の影響を及ぼし，友人その他の交遊関係の貧しさや歪みを生み出している事を指摘する事ができる。こうした状況のなかで高校生はどのような友人関係を持ち，どのようなグループ活動をしているのであろうか。またそれとの関連でどのような余暇行動を展開し，どのような生活意識を持っているのであろうか。

1. 個人的友人関係

a. 学級における友人

学級内の友人関係の調査によると次のような事が考察される。

現在の高校生の学級内の友人関係は非常にばらつきがある。第1の問題点は，男子では「友人がない」というのが30%も占めている事である。これは多くの調査でも同じ事が考察される事であり，孤立化への傾向が顕著に現われている事である。これに対して女子ではその現われ方は微弱であり，クラスの内での友人関係は安定しているようである。これは身体的，精神的発達による影響も少なくない。すなわち中学2年ないし3年の頃の自我の確立の初めの時孤独の味を知り，そのなかで自分をみつめた女子は真の友人あるいは友人というものに対して男子以上の価値を認めているのであろう。男子の友人関係を普通科の生徒と実業科の生徒と比較すると，生活の目標に起因すると思われる差が認められる。すなわち実業科の生徒は交遊範囲が広いことがうかがわれる。

b. 学校内の友人

学級内の友人を除いた学校内の友人数は平均して学級内の友人数と同じかややそれを上まわり，大体5—6人である。学校内の友人でも男子には「なし」が目立っている。このように女子に比較して男子高校生の孤立化傾向はきわめて大きい。これは公立の高校により顕著である。この現象は昭和44年前後の学園紛争の前後からみられ始めた現象で，自我の確立のための一つのステップとも考えられるが，遊びのなかで集団活動をする事の少なかった青年にとって学校内の友人と交遊関係が順調な事は自我の確立に良い影響を及ぼすはずであるからより望ましい方向＝幅広い交遊関係＝に向かう必要がある。

第1表 学級内の友人 (%)

		1—5人	6—10人	11人以上	なし	不明
公立高校	男	44	20	2	32	2
	女	67	21	1	10	1
私立高校	男	54	21	7	17	1
	女	62	27	3	7	1

第2表 学校内の友人 (%)

		1—5人	6—10人	11人以上	なし	不明
公立高校	男	60	11	2	27	
	女	69	15	1	15	
私立高校	男	54	19	6	20	1
	女	70	12	2	14	2

c. 学校外の友人

学校外の友人数は私立の実業科の男子に際だって多くなっており，公立の高校生は5—6人である。この原因としては先に述べたとおり，進学準備のための時間的，精神的圧迫がない事と，彼らの生きがいが「楽しくすごす事」などによるものであると考えられる。中学生よりも高校生に校外の友人が多いことがうかがえるが，その友人関係を見ると，小中学校時代からの友人が95%を占めており，小中学校時代の友達が校外の友人として持続している場合がきわめて多いことがうかがえる。一方高校生の友人には「偶然知りあった」というものも徐々に増しており，その活動範囲の

第3表 学校外の友人 (%)

		1—5人	6—10人	11人以上	なし
公立高校	男	54	14	5	27
	女	76	9	3	12
私立高校	男	43	17	11	26
	女	67	10	2	18

第4表 高校生の学校外友人のきっかけ (%)

		小学・中学時代からの友人	近所に住むようになって	家族を通して知りあった	友人を通して知りあった	偶然知りあった	その他
公立高校	男	95	24	4	30	13	6
	女	94	13	4	19	8	8
私立高校	男	82	24	5	35	21	8
	女	93	18	4	25	10	4

広がりをものがたっているが，その友人関係の質が現在問題となっている。

これら学級内の友人，学校内の友人，学校外の友人には次の関係が認められる。つまり学級内の友人が多ければ学校内の友人も多いという関係があり，これは学校の種別，性別にかかわらずかなり安定しているとみる事ができる。このように学級内と学校内の友人関係はかなりの程度重なり合って何らかのつながりを持っている場合が多く，これは個々の性格によるものであろう。この現象は中学生ではみられない。これは中学生の生活が学級という一つの単位として活動する事が多いためでもあろう。また高校生の男子では，学級内—学校内，学校内—学校外のいずれについても孤立化率は非常に高く，クラス内—学校内の場合が著しい。すなわち13%弱が学級内にも学校内にも親しい友人を持たないと思っている事を示すものであって，両極端の現象が出現している。しかしこの両極端の現象は，同一次元で考えられねばならない。すなわち自我の確立期には孤立，集団帰属の欲求が生じる事である。厳しい批判的生活態度は他人と自分に向けられ，それだけ自他の摩擦を生じるわけである。これが友人関係に及ぼす影響が両極端の現象になるわけである。またこの現象は中学2・3年生頃から急速に進んでいる事が認められるわけで，それぞれの個人にとってそれは社会問題とその意識の変化を伴うものであるから，青年は大きな問題をかかえている事を示すものであろう。

2. 集団的友人関係

a. 学級内のグループとその活動

a-1. グループ所属

学級内にあるインフォーマルなグループに所属しているものは男子に少なく女子に多いことがうかがえる。女子ではこのインフォーマルな集団が学年，クラス，学校を問わず形成され，さらに年齢，学歴を越えて維持される事すらある。これに対して，男子では集団形成傾向が弱く，高校生では非常に稀薄化するという事ができる。これは男女の心理的発達のわずかなずれを表わすものであろうが，本能的な相違であるかも知れない。

第5表 学級内のグループ所属数 (%)

		1つのグループ	2つのグループ	入っていない	不明，その他
公立高校	男	26	1	67	
	女	65	1	34	
私立高校	男	16	1	79	4
	女	46	3	45	6

a-2. グループのサイズ

クラス内のグループの規模は大体5—6人程度である。特別な活動の目標を持たずに，遊び，雑談をしたりするインフォーマルなグループ，規制のないグループとしてはこの程度の規模がグループ構成員全員の共感が得やすいのであろう。

第6表 学級内のグループの規模 (%)

		1—5人	6—10人	11人—	その他
公立高校	男	54	31	1	14
	女	49	43	2	6
私立高校	男	47	37	2	14
	女	52	40	—	8

a-3. グループ活動の内容

インフォーマルなグループであるため大部分は雑談や遊戯，一緒に帰宅するなどを主な内容とする遊びに集中している。青年の雑談の内容は以下のとおりにまとめられよう。①スポーツ，テレビ，ラジオ，映画，ファッション，趣味等，会話それ自体が楽しいもの，

第7表 学級内グループ活動の内容 (%)

		学習	スポーツ	製作演奏	鑑賞収集	外出	旅行遠足	あそび	その他	不明
公立高校	男	2	3	8	2	11	4	70	—	—
	女	2	—	1	1	7	1	87	—	—
私立高校	男	3	7	2	—	12	3	50	—	23
	女	3	1	—	—	11	3	70	—	12

第8表 青年の雑談の内容 (%)

内容	
異性について	22
受験について	19
勉強について	8
クラブ	8
映画・テレビ	8
社会情勢	8
趣味	7
教師のうわさ	5
友人のうわさ	5
学校行事	5
将来の進路	4
人生・宗教	1

②受験，進学，異性についての相談等に属するもの，③政治，経済等の社会情勢，時事の分析，④生き方，自己分析等，⑤その他，である。

そして青年期には雑談の価値が次のように認められているようである。

①心をかよわす事ができる
②安心感を持てる
③楽しい
④慰め
⑤逃避
⑥精神的片わにならない
⑦人間関係を構成し，共通の話題が友人関係を長く持続する事ができる

などである。またこのグループ活動では映画，喫茶店，ショッピング，ドライブなどを内容とする「外出」「旅行」なども増加している。そして学習活動は中学生と違って学級内集団においては第二義的である事が示されている。

a-4. グループの名称

クラス内のインフォーマルなグループには名称がないのが普通である。もしあるとすれば，それが特殊な目的をもって作られ，それを他に示したいという欲求に基づくものであろう。性別では男子の方が女子に比較して名称をつけたがる傾向が強いこともうかがえる。

第9表 グループの名称について (%)

		名称あり	名称なし	不明
公立高校	男	21	79	—
	女	13	87	—
私立高校	男	20	38	42
	女	—	65	35

b. 学校内のインフォーマルなグループ

b-1. 学校内のグループへの所属

クラス内のグループに所属するものよりも当然少なくなるが，それでも10—30%の範囲で所属している。男子に比較して，女子の方が所属率が高いのはクラス内のグループの場合と同じである。

第10表 学校内のグループへの所属 (%)

		1グループ	2グループ	入っていない	その他
公立高校	男	10	1	89	
	女	31	1	68	
私立高校	男	12	2	84	2
	女	26	1	70	3

b-2. グループのサイズと活動の内容

グループのサイズと活動内容は学校内のグループと同じ様子がうかがえる。概していえば「遊び」や「外出」等の内容がかなり増えており，それだけ娯楽的要素が強いようである。

第11表 学校内のグループの規模 (%)

		1—5人	6—10人	11人以上	不明
公立高校	男	52	43	5	—
	女	61	36	3	—
私立高校	男	49	20	19	12
	女	53	39	1	7

第12表 学校内グループの活動内容 (%)

		学習	スポーツ	製作演奏	鑑賞収集	外出	旅行遠足	あそび	その他	不明
公立高校	男	2	5	14	2	14	3	60	—	—
	女	1	2	—	2	14	3	78	—	—
私立高校	男	4	7	7	—	17	5	42	2	11
	女	4	—	—	—	24	2	51	—	19

c. 学校内のグループ・サークル

c-1. 所属の状態

クラブやサークルは学校内グループの場合はフォーマルな集団と考えられている。このフォーマルな集団に属している生徒の数は50%近くを占めているが，これは強制的でないまでも，クラブやサークルへの所属を奨励している学校が多い事に起因するものであろう。所属の割合は性別，学校の種別でかなり異なる。性別では女子の所属率が非常に高い。男子ではどこにも属してない者は公立高校で40%前後を占めており，私立高校ではさらに多くの者が非所属者である。この点で高校の男子が学校社会に十分組み込まれ，その活動を楽しみ，その集団に適応している者が少ないのが現状としてうかがわれる。

学校別では公立高校の生徒に比較して，私立高校の生徒のクラブ・サークルへの帰属率が少ない。これから公立高校生では学校生活の占める割合が多く，ある種の期待感を抱いていると考えられる。

c-2. 活動内容

学校内クラブ・サークルの場合には，その名称によってほぼその活動内容を理解できる。その活動内容は公立，私立を問わずスポーツ活動が最も多い。しかし性別による相違があり，男子と比較して女子におけるスポーツの比率はかなり低くなっており，その分だけ，茶道・華道等の諸道，音楽が女子に多くなっている。また自然科学的研究や人文科学的な研究は公立の普通科に多く，女子にも多くの所属者がいるようである。

d. 学校外のグループ・クラブ・サークル

d-1. 所属，サイズ，活動内容

学校外の集団に所属するものは少なく，15—19%の者が所属している。その集団はボーイスカウトやスィミング・クラブなどが含まれるから，集団としてのサイズは非常に大きくなっている。

第13表 学校外のグループ・クラブ・サークル所属数 (%)

		1グループ	2グループ	3グループ	入ってない
公立高校	男	17	1	—	82
	女	17	3	—	80
私立高校	男	15	3	1	81
	女	13	—	—	87

第14表 学校外所属集団の規模 (%)

		1—5人	6—10人	11人以上	不明
公立高校	男	21	29	50	—
	女	42	21	33	—
私立高校	男	13	27	33	27
	女	39	20	18	23

第15表 学校外所属集団の活動内容 (%)

		スポーツ	学習研究	娯楽収集	諸道諸芸	音楽バレー演劇	技術製作	社会活動	ツーリング	その他
公立高校	男	35	4	22	2	2	3	1	17	14
	女	8	1	47	1	10	—	7	3	23
私立高校	男	24	2	20	—	6	3	6	11	28
	女	7	9	25	2	16	2	16	—	23

その活動は男子では「スポーツ」「娯楽・収集」が多く，女子では「娯楽・収集」「音楽その他の諸道」などが多い。これから次のような事が言えよう。

①公立高校の女子における「娯楽・収集」が著しく高い。これは私立学校の「音楽，バレー，演劇，諸道」が多いのと対象的で，公立学校女子の特殊性を示しているものである。

②「技術・製作」等の活動は公立の女子には目立って少ない。

③私立の女子高校生に「音楽，バレー，演劇」のクラブ・サークルに属する者が多く，その文化的意識に公立高校生との差を見る事ができる。

④高校男子のなかに「ツーリング」の比率が高まっており，特に私立高校に著しい現象である。このなかには暴走族グループも含まれているが，理想我と現実我との相違で苦しんでいる青年の社会不適応，逃避とも考えられる。

これらの学校外の所属集団は多くのフォーマルな集団が含まれているわけで，そこに名称のあるものが多い。

3. 青年期の友人の特徴

a. 形態別

青年期にとってどんな友人関係が一番大切なものと考えられているのであろうか。おおよその傾向としては次の事が言えよう。

①クラス内の親友が最も重要である。

②これについで学校外の親友の重要度が高い。

③中学生がクラスや学校内という比較的狭い場で成立する友人関係に依存して，その関係を重視する傾向が強いのに対して，高校生では幅広い個人的友人関係に重点をおく傾向がある。これは大人の友人関係への移行型であろう。また中学校までの友人関係が高校に進学しても継続している。

b. 同級生との関係と友情の評価

同級生との関係は公立私立を問わず「普通である」が60%を占めて大体良好であり，「うまくいっていない」ものが1割前後である。そして高校生は男子で50

第16表 同級生との関係 (%)

		非常にうまくいっている	かなりうまくいっている	普通	あまりうまくいっていない	全くうまくいっていない	不明
公立高校	男	4	29	62	4	1	—
	女	3	25	65	6	1	—
私立高校	男	6	25	57	10	1	1
	女	4	30	59	5	2	—

第17表 高校生の友情評価 (%)

		高い評価を与える	普通	頼りにならない	不明
公立高校	男	43	31	26	—
	女	61	28	11	—
私立高校	男	49	21	30	1
	女	60	21	19	1

%前後，女子では60%前後が友情に価値をおいている。この評価は中学生と比較すると女子は大体同様であるのに対して，男子は高校生の方が低くなっている事がうかがえる。これは女子が友情への信頼とその絶対化が持続するのに対して，男子が進学等の環境と心理的発達があいまって孤立化傾向がみられている。このなかで問題になるのは児童のギャングエイジの時期にその集団行動を経験してこなかったものが中学生の孤独の味を知った後の高校生の時期に仲間意識に対して否定的な見方をする者が多いという事である。

4. 集団への参加とその活動

青年は自分の所属する集団の活動に対して種々の参加の仕方，態度を示す。その違いは集団の種類，規模，フォーマルかインフォーマルかによっても生ずるわけである。

クラス単位の活動には，高校では遠足，運動会，掃除，その他のホームルーム活動があげられるが，それに対しては積極的協力と消極的参加とで大部分を占めている。とくに最近では消極的参加が多く，高校生のクラス単位の活動は低調な所が多い。またリーダーシップをとるのは男子に多く，独自行動は女子が多いが，それでも中学生と比較するとクラス内活動への参加態度には消極的なものが多いようである。

インフォーマルなグループ活動に対する参加の態度は，クラス単位の活動よりもはるかに積極的である。すなわち「積極的に参加する」のが全体の50%を占め，「リーダーシップをにぎる」のも1割から2割に達している。これは集団の構造から見ても当然で，集団の所属員の意識の違いがこの結果を生じているわけである。つまり高校生は中学生と比較して，自分の所属する学級についての帰属感が少なく，そこでリーダーシップを発揮するよりその拘束を逃れて「適当につきあっておく」という消極的な態度や孤立的態度をとる者が増加している。この共感意識の不足は都市全体のものだとしても，青年期の生活と行動に一つの不足性を感じさせる因子なのであろう。

第18表 学級活動への参加の態度 (%)

		作業の指揮をする	積極的に協力する	適当につきあっておく	自分の好きなようにする	その他
公立高校	男	5	24	51	15	5
	女	2	37	50	5	6
私立高校	男	4	31	44	18	3
	女	4	31	55	7	3

第19表 グループ活動への参加の態度 (%)

		作業の指揮をする	積極的に参加する	適当につきあっておく	自分の好きなようにする	その他
公立高校	男	15	50	28	4	3
	女	12	62	21	2	3
私立高校	男	14	46	23	8	9
	女	13	56	26	1	4

5. 余暇生活のすごし方と友人関係

余暇時間のすごし方はその活動内容によってその参加人員がかわってくるのは当然である。一般的にみて青年期の余暇時間のすごし方は独りですごすことが多い事がうかがえる。これは青年の余暇活動の内容が，ラジオ・テレビの視聴時間が非常に長く，趣味やスポーツ，散歩に使う時間が少ない事によるものであろう。余暇のすごし方についての青年の願望は男女とも気分転換をあげるものが多い。それの具体的行動としては旅行が男女とも著しく高い。このように余暇の目的，行動が，都市の生活に適応するという観点からみると余暇のすごし方満足度と交遊関係には関連性がきわめてわずかか，またはほとんどないと言える。

Ⅲ 終りに

生活環境のみならず生活様式にも都市化現象の進んだ東京のような大都市での青年の行動は多くの問題点を抱えている。とくに家庭・職場に対する第3の余暇生活の場に青年の発育，生長にとってプラスの面を持つような施策が必要であると考える。青年の心身の発達に個体差が大きい事もあって青年が自他の摩擦を意識し，理想我と現実我との間で苦しむ事も多い。また日本では老人と並んで青年期に自殺が多いが，その症状から病気であると考えられる。一つ一つの場面で青年が友人を意識し，その望ましい友人関係，集団帰属は青年を安定させ，より自己を高めるのに必要であろう。